

漢文-チュノム・ベトナム語対訳資料『傳奇漫録』解音における 固定的な訳と例外的な訳

— 「之」「於」「于」「夫」と虚詞 chung を中心に —¹

鷲澤 拓也

キーワード： 傳奇漫録 解音 ベトナム語 字喃 漢文 翻訳 虚詞 訓読

要旨

16世紀にベトナムで書かれた、漢文と古ベトナム語の対訳資料『傳奇漫録』解音では、原文の漢文と訳された古ベトナム語が逐語的に対応していることで知られる。本稿では、古ベトナム語の訳文中で多様に用いられる虚詞 chung が原文の「之」、「於」、「于」、「夫」その他の語とどのように対応しているかを数量的に分析する。その結果、これらの語は原則として chung に訳されることが固定化されていることがわかったが、その原則から外れる場合も一定数見受けられた。例外的な場合について分析すると、文法的な環境と訳語との相関関係が見られた。すなわち、代名詞の「之」は動詞句末に置かれているか否かといった統語的な条件により訳語が変わり、助詞の「之」、「於」、「于」、「夫」はこのうち2つの語が互いに統語的に近接する位置に置かれているか否かにより訳語が変わるという傾向があることが明らかになった。『傳奇漫録』解音のこれらの特徴は、日本の「訓読」と一定の類似を示す。

1. はじめに

ベトナムは日本と同じく漢字文化圏に属し、漢文資料を大量に受容したが、日本の「訓読」と同様の定まった翻訳法があったかどうかについては、様々な議論がある。岩月 (2008) は、漢文とベトナム語が併記されたいくつかの資料を取り上げた上で、ベトナムでは日本のように、母語の統語論に合わせて語順を転倒し、特定の漢字に非漢字語（固有語）を当てて「発音」するといった例は少ないが、頭の中で漢文を理解するプロセスにおいてのみ非漢字語を援用することは見られたとしている。グエン・ティ・オワイン (2013) は、各漢字とベトナム語の対応関係には時代を通じて社会的に固定したものがあることや、いくつかの対訳資料において、一字一句訳語を当てたり、語順を変えたりといった訳し方が共通して見られることなどを挙げ、このような翻訳法を、ベトナムにおける広い意味での「訓読」と捉えている。

これらの研究で共通して取り上げられているのは、13-19世紀のベトナムにおいて、漢文か

¹ 本報告は、東京大学の「次世代人文社会学育成プログラム」の助成金、日本学生支援機構「海外留学支援制度（長期派遣）」、「海外留学支援制度（大学院学位取得型）」の支援により可能となった。ここにお礼申し上げる。

ら一定の規則に基づいて翻訳された「解音 (giài âm)」などと呼ばれた特殊な文体のベトナム語が、漢文に註釈等の形で付された資料である。このベトナム語は、漢字を転用したり、変形したりして作られたチュノム (字喃) という文字によって表記された。解音の中でも 16 世紀末に書かれた代表的文献である『傳奇漫録』の解音は、特に厳密に一字一句直訳的に訳されていることで知られる。また、用いられる文体や語彙、文法機能を表す語の用法が、当時のベトナム語の話し言葉と比較して特殊であったことが指摘されている。

本稿では、この『傳奇漫録』解音において、多様な用法で用いられる虚詞、すなわち文法的機能を表す語である chung が、原文となる漢文のどの語と対応しているかを統計的に分析し、実際にどれほど逐語的といえるかを考察する。そして、原文と訳文の対応関係は原則として固定的であるものの、周囲の語の環境により、例外的な訳語が当てられるという可能性を指摘する。

まず 2~5 章にて、研究対象となる古ベトナム語や『傳奇漫録』解音について背景・前提となる情報を提示する。続いて 6 章で、本稿の主な議論の対象である虚詞 chung について、辞書の記述や先行研究を紹介する。7 章では chung と関連の深い諸虚詞の訳し方について全体的な出現回数を示し、原則的に固定した訳があることを、例を挙げながら説明する。8 章では、原則から外れる例について、前後にある語の状況によって例外的な訳がなされるという傾向を示すことにより、変則的な訳し方の説明を試みる。最後に 9 章にて、『傳奇漫録』解音では原文の各語に対して訳が固定的にあてられることが一種の「訓読」現象と見ることもできるが、周囲の語に影響を受けて訳が変わる傾向は、「訓読」の性質に反することを考察し、結論とする。

2. チュノムとその読み方

チュノムは元来の中国における漢字と同様に表語文字²で、音や意味が近似する漢字を転用したものと、音や意味の近似する漢字や漢字の一部を組み合わせて創作したものがある。

各チュノムの読み方については、これまでの研究者がそれぞれどの語と対応するかを推定した上で、現代ベトナム語での語を対応させている。現代音に基づいたローマ字正書法 (クオック・グー)³ で記しているため、当時の発音を忠実に表してはいない。また読み方が不明な文字や、読み方が議論の対象となっている字がある。(Nguyễn Q. Hồng⁴ 2008: 217-221)

本稿中の『傳奇漫録』解音におけるベトナム語のローマ字表記は、Nguyễn Q. Hồng (2001) にて翻字されているものを採用した。

² 1 文字が 1 語 (または形態素) を表す文字。チュノムの場合この単位が音節の単位とも合致する。

³ 母音 : a/a/; ā/ā/; â/â/; e/e/; ê/ê/; i,y/i/i/; o/o/; ô/o/; ơ/ơ/; u/u/; ư/ư/

子音 : b/b/; c, k, q(u)/k/; ch/c/ ([tʰ]); d, gi/z/[z]; đ/d/; g, gh/y/; h/h/; kh/x/; l/l/; m/m/; n/n/; ng, ngh/ŋ/; nh/n/; p/p/; ph/f/; r/z/ ([z]~[ʒ]); s/s/ ([s]~[ʃ]); t/t/; th/tʰ/; tr/c/ ([tʰ]~[tʃ]); v/v/; x/s/ ([s])
声調 (調値) : a 44; à 21; á 35; à 312; ă 325 (声門閉鎖を伴う); ạ 31 (声門閉鎖を伴う) (川本 2011:1906-1913)

⁴ ベトナム語の学術論文ではベトナム人の名は名字でなく名前の最後の 1 音節で表す慣例があるため、本稿では名字と最後の音節、および他の音節の頭文字を記す。

3. 時代区分および背景

『傳奇漫録』の解音に見られるベトナム語は、Vũ Đ. Nghiêu (2011:230-270) によると、13-16世紀の「古ベトナム語」に分類される。「古ベトナム語」は「先古ベトナム語」の後、「中世ベトナム語」の前であり、チュノムが成立してから、ローマ字資料が現れるまでの段階を指す。漢文文書の翻訳やベトナム語による創作が盛んになった時期であり、それに伴い、固有語による表現が豊かになったことと、漢語からの借用語が増えたこと、漢語に相当する固有語が創作されたことが特徴とされる。音韻史的には、前音節を伴う CvCVC 構造の語が徐々に減少し、単音節化が進む段階だが、音節頭子音に子音クラスターを持つ語は依然として多くあったと推定されている。

4. 『傳奇漫録』解音について

『傳奇漫録』(*Truyện kỳ mạn lục*) は、16世紀⁵に阮嶼(グエン・ズー、Nguyễn Dữ)⁶によって書かれたもので、解音は16世紀末に阮世儀(グエン・テー・ギー、Nguyễn Thế Nghi)によって付されたとされる。『傳奇漫録』は、ベトナムにまつわる伝奇(この世とあの世にわたる奇譚を内容とする短編小説)を集めたものである。5篇で1巻を成し、全4巻からなる。中国の伝奇小説の影響を受けているものの⁷、ベトナムを舞台とし、ベトナム人が登場人物となり、李陳朝期から黎朝期まで(最も早いものは1396年、最も遅いものは1458年)の歴史的事実を背景にしている。世相や人情を、叙事的にまた抒情的に、奥深く表現しており、ベトナムの漢文による散文の中でも傑作といわれている^{8 9}。

その解音については、チュノムによる詩文学が盛んになり、また仏教・儒教・道教などの宗教書の解音が成されるようになった当時、非宗教書かつ散文¹⁰で書かれたものは珍しく、同書は「訳文学」の始まりといわれる。一言一句原作に忠実に訳されており、同時代の他の文献と文体面での違いが大きく、当時の書き言葉を反映しているといわれる¹¹。また同書は、古ベトナム語の語彙・語法、16-17世紀のチュノム、伝統的な訳の中での漢語と固有ベトナム語の使われ方、文献学など、多様な方面で価値を見出すことができるものであり、文学、言語学、ベトナム語学、漢喃学、文献学など多くの分野に益するものとなる¹²。川本(1999:89)も、『傳奇漫録』解音に見られるチュノムは数的にも相当にまとまった、当時の文字と言語について貴重な資料的意義をもつものであると述べている。

現存する刊本は5種ある。それぞれ(1)1712年、(2)1714年、(3)1737年、(4)1763年、(5)1774年の刊本である。(1)は阮嶼による漢文のもののみで解音はなく、それに解音と注釈が付

⁵ 厳密には、1547年あるいはそこから遡って数年乃至数十年の間の時点と考えられる(川本1999:9)。

⁶ 「嶼」の字音は Tữ とされるべきところだが、慣用的に Dữ と読んでいる(川本1999:7-8)。

⁷ 川本(1999:15-26)。

⁸ 川本(1999:3)、Nguyễn Q. Hồng(2001:9-10)。

⁹ ベトナム人が書いた漢文であるため、ベトナム語の影響も考えられるが、それについての分析には未だ至っていない。

¹⁰ 本文の中に漢詩は含まれているが、解音で韻文にはなっていないため、訳への影響は少ないと考えられる。

¹¹ Nguyễn Q. Hồng(2008:429)。

¹² Hoàng T. H. Cẩm(1999:11-12)。

されて (2) が刊行され¹³、後の刊本は (2) の重刊本である。ただし、(2) と (3) は上冊 (1,2 巻) のみしか現存していない。(3) は最も誤字、汚損、摩耗が少ない。一方 (4) および (5) は上下両冊が揃っているが、汚損や摩耗が随所に見られる¹⁴ (川本 1999:27-49)。

本稿の例文およびローマ字転写は Nguyễn Q. Hồng (2001) にあるものを基本的に採用した。ここで用いられている版は (5) のものである。版により字が異なる部分で、他の版にあるものが妥当と思われた場合は、そのように明記の上、妥当と思われる方がローマ字転写にて採用されている¹⁵。なお、字の判別が難しいものは、川本 (1999) において活字化されているものを参考にした。

1940 年代に Trúc Khê によって現代ベトナム語に訳されている。Nguyễn T. Huan (1962) はフランス語に訳している。Hoàng Đ. Quảng et. al. (1994) には Trúc Khê の訳が収録されており、またそれをもとにフランス語訳がなされている。

5. 『傳奇漫録』解音における訳の原則

ベトナム語は、漢文と同じく孤立語であり、基本語順が SVO であるが、修飾語は漢文と異なり被修飾語に後置される。『傳奇漫録』解音では、漢文の一語一語に対応する語をあて、修飾一被修飾の前後関係を変えるという逐語的な訳がなされる。ただし、次のような場合もたびたび見られる。

- ・固有名詞に「人」、「地」、「王朝」といった名詞が付される：例文 (8) の người (人)、(20)、(26) の đất (地)、(2)、(3)、(5) の nhà (王朝)、(26)、(27) の nước (国) など。
- ・漢文の原文にない文法機能語を訳で追加する：(25) の Copie là など。

逐語的な訳の例として、多様な意味を持つ接続詞「而」¹⁶ はすべて接続詞 “mà”¹⁷ に訳され、接続詞または副詞の「則」¹⁸ はすべて “thì”¹⁹ に訳される。回数はすべては調べられていないが、初めの 2 話だけで、「而」は 55 回、「則」は 30 回用いられている。

6. 虚詞 chung について

6.1 現代ベトナム語の辞典における説明

¹³ この刊本が『新編傳奇漫録』または『新編傳奇漫録増補解音集註』と題され、より正式にはこちらの書名も用いられる。漢文のみの版は『舊編傳奇漫録』と題されているが、新編の刊行にあたって「舊編」と付されるようになったと考えられる (川本 1999:29-30)。

¹⁴ 川本 (1999:27-49)。

¹⁵ Nguyễn Q. Hồng (2001:21)。

¹⁶ 並列関係、方法や状態、時間的前後関係、逆接、仮定、補充などを表す (李 1994)。

¹⁷ 現代ベトナム語での用法には、逆接、別の側面・補充、目的、結果・効果、仮定、関係詞的用法がある (Hoàng T. T. Linh 2011)。古語辞典 (Vương Lộc 2002) には “mà” の項目はないため、現代と異なる古い用法は特にないといえる。グロスでは一律に「しかして」とした。例文 (18) 参照。

¹⁸ 接続詞としての用法は、時間的前後関係や条件と結果の関係などの順接、逆接、仮定、譲歩。副詞としては、強い肯定、強調、範囲の限定など (李 1994)。

¹⁹ “thì” とも。現代ベトナム語では、仮定に対して起こりうる結果、別の側面、時間的前後関係・即時、説明 (「～は」) といった用法をもつ (Hoàng T. T. Linh 2011)。古語辞典には、“thời” も “thì” も項目がない。グロスでは一律に「すなわち」とした。例文 (16) 参照。

現代ベトナム語の辞典 (Hoàng T. T. Linh 2011) には、chung の単独での虚詞の用法は載っていない。現代残っているのは、理由や原因を表す熟語 “vì chung” および “bởi chung” の一部としての用法である。

6.2 古語辞典における説明

古語辞典 (Vương Lộc 2002) には、以下のような記述がある。([] 内は本稿筆者による。)

結詞²⁰

- ① 前に言われた事物や出来事の場所、存在または発生を表す語。“ở”, “tại” [「～で」など同様の意味を表す現代語。]
- ② 前に言われた出来事の発生する時間の範囲を表す語。“đương”, “trong”
- ③ (常に “bởi”, “nhân”, “vì” といった語と結合して) 原因を表す語。
- ④ (形容詞の後、名詞の前の位置にて) 比較を表す語。“hơn” [「～より」]
- ⑤ 直後に置かれる言葉が、向かう対象であることを表す語。“cho”, “với” [「～に」]
- ⑥ (代名詞の前に用いて) 直後の言葉が、前に言われた事柄と直接関係のある対象であることを表す語。“đôi với” [「～に対して」]

7.1 および 7.3 に見るような「之」や「夫」に相当するような意味がここでは見出されないことが留意すべき点である。

Trần T. Dương (2014) は、『國音詩集』²¹を中心とする 15 世紀のより詳細な古ベトナム語辞典だが、ここでは Vương Lộc (2002) にあるものに加え、次のような意味・用法が書かれている。

- ① 「之」の訳、修飾-被修飾構造の中の助詞。
- ② 無意味の虚詞、動詞と目的語の間に入る。

[…]

- ⑤ 無意味の挿入語

⑤については、「極めて」を意味する副詞 (cực) と「美味しい」を意味する形容詞 (ngon) の間に chung が入る例文が挙げられている。

6.3 Bùi T. Hùng (1987) による分析

Bùi T. Hùng (1987) は、『傳奇漫録』解音の第 1 話および『課虚録』の解音 (『禅宗課虚語録』)²² において、次のような意味・用法が認められるとしている。以下の各例文は、Bùi T. Hùng

²⁰ ベトナム語学で、前置詞と接続詞を合わせて結詞 (kết từ) という。(Vũ Đ. Nghiệu 2010:307)

²¹ 15 世紀に阮薦 (Nguyễn Trãi) によって書かれた、現存する最初のベトナム語による詩集 (Nguyễn Q. Hồng 2008:426)。

²² 13 世紀後半に陳太宗 (Trần Thái Tông) によって書かれた仏教書『課虚録 (Khóa hư lục)』に、慧静 (Tuệ Tĩnh) が解音を付したものである。成立年代は、17 世紀とする説と、14 世紀とする説がある。

(1987) に挙げられているもの。ただし、(4) と (6) は除く (脚注 27、30 参照)。

I. 「之」の訳語としての chung

①語順が逆転する場合 (「A 之 B」→“chung BA”)

A は修飾語 (名詞、形容詞、動詞、または命題)、B は被修飾語 (名詞または名詞化された形容詞・動詞) で、ベトナム語の語順と合うものとなり、chung は前置詞や発語のような役割を果たすようになる。

(1) (漢) 策烏騾之倦足 [烏騾の倦足を策 (むちう) つ] <I:5b:5>²³

(喃) {木越} 𪗇蒸眞瘳馭烏騾

(口) vọt giục chung chân mỏi ngựa Ô Truy

鞭 促す CHUNG²⁴ 足 疲れた 馬 烏騾

「烏騾²⁵の疲れた足を鞭打って馭り立てた。」

A は「烏騾」、B は「倦足 (疲れた足)」である。

(2) (漢) 興攻秦之師 [秦を攻むるの師を興す] <I:4b:1>

(喃) 𪗇蒸軍刀²⁶茹秦

(口) Dấy chung quân đánh nhà Tần

起こす CHUNG 軍 打つ 王朝 秦

「秦を攻める軍隊をおこした。」

ここでは A は「攻秦 (秦を攻める)」、B は「師 (軍隊)」である。

②語順がそのままの場合 (「A 之 B」→“A chung B”)

A は名詞、B は動詞、形容詞、または名詞で、“A chung B”全体で文中の 1 つの句となる。

²³上から順に、漢文およびその訓読、チュノム (字喃)、ローマ字翻字、グロス、和訳である。「< >」は引用元の巻、ページ、および行であり、a は表、b は裏をあらわす。チュノムは、Vietnamese Nôm Preservation Foundation のウェブサイトの Nôm Lookup Tool において検索・表示可能な字はそのまま表記し、そうでないものは、{} に囲まれたものを 1 文字とし、記号のないものは左右、「/」は上下、「+」はその他の位置関係を示すこととする。訓読は主に『漢辞海』(佐藤ほか 2011) に基づいて筆者がなしたもので、漢文の読解を容易にすることを意図したのだが、本稿の研究テーマの 1 つともなっている訓読の議論とは、直接の関係はない。解釈、和訳、歴史的事実については Nguyễn T. Huan (1962) の仏訳および註釈、Hoàng Đ. Quang et. al. (1994) による仏訳・註釈と、同書に収録されている Trúc Khê の現代ベトナム語訳、そして Nguyễn Q. Hồng (2001) による註釈を参照した。漢文の原文とベトナム語訳の意味が大きく異なっている場合、和訳の中で「/」の前に漢文、後にベトナム語の文の和訳をそれぞれ記した。

²⁴ chung の訳語は定め難いので、グロスでは一律に CHUNG とする。

²⁵例文 (1) を含む第 1 話では、項羽が主人公の夢に現れ、項羽と劉邦について論じられる。項羽は、中国の秦が滅びた後、楚の王を自称した武将で、漢の初代皇帝となる劉邦と戦った。烏騾は、龍の化身と言い伝えられていた大きな黒い馬。項羽はこれを鞭によって降伏させた。

²⁶「刀」字は「打」の誤り (Nguyễn Q. Hồng 2001:39)。

(3) (漢) 天之扶漢 [天の漢を扶(たす)くるは] <I:5a:6>

(喃) 歪蒸扶祚茹漢

(口) Tròi chung phứ tộ nhà Hán

天 CHUNG 助け支える 王朝 漢

「天が漢を助けたのは、」

ここでは A は「天」、B は「扶漢(漢を助ける)」である。

II. 「於」および「于」の訳語としての chung

前置詞として、地点や原因を表す。

(4) (漢) 但於車中叉手不交一言²⁷

[但(ただ)車中に於いて叉手(さしゅ)し、一言を交わさず] <II:47a:2>

(喃) 多蒸鮑車執{手思}拯交蔑例啞

(口) Chin chung trong xe chấp tay, chẳng giao một lời nói.

ただ CHUNG 中 車 結び合わせる手 否定 交わす 一言 言葉 話す

「ただ車の中で手を組んで礼を示し、一言も交わさなかった。」

(5) (漢) 然卒見斃於漢 [然るに卒(つひ)に漢に斃(たふ)さる] <I:5a:5>

(喃) 雙{婁車}吏体蒸茹漢折

(口) Song sau lại thấy chung nhà Hán giết.

しかし 後 逆に 見る²⁸ CHUNG 王朝 漢 殺す

「しかし結局、漢に倒されてしまった。」²⁹

III. 「諸」および「成」の訳語としての chung

『課虚録』の解音において現れる。

① 「諸」は「之」と「於」の2文字を語源としていて、どちらもまとめて chung 1語で訳される。『課虚録』の解音では、「すべて」という数の範疇の語の前に置かれている。

② 「成」が chung と訳されている箇所が1箇所のみある。

IV. 「夫」の訳語としての chung

「夫」は、発語として働き、また文中で強調のために置かれる。訳された虚詞 chung も同様の意味を持つ。

²⁷ 同例文は、理解の易しいと思われる文を筆者が選んだもの。Bùi T. Hùng (1987) では例文 (22) と同じ文が挙げられている。

²⁸ “thấy”に受身の意味はないが、「見」に対応する語としてそのまま訳したと思われる。

²⁹ Bùi T. Hùng (1987) はこれを原因の用法と捉えているが、受け身文における動作主と捉えることも可能である。

(6) (漢) 夫復何言 [夫 (そ) れ復 (また) 何を言はん] <I:29a:4> ³⁰

(喃) 蒸吏牢羣呐

(口) Chung lai sao còn nói!

CHUNG また どうして さらに 言う

「そもそもまた何を言うことができようか。(もはや何も言えない。)」

7. Chung への訳の分析

訳文中に chung が用いられる場合、対応する漢文の同じ箇所を用いられる語を調べると、10 回以上 chung に訳されるものは Bùi T. Hùng (1987) も取り上げた「之」「於」「于」「夫」の 4 語となった。他に「凡」「諸」「乎」などがあり、原文に対応する語がない場合もあった。頻度の多かった 4 つの語については、chung 以外の語に訳される場合も調べたところ、表 1 のように、4 語とも 4 分の 3 以上は chung に訳されることがわかった。この 4 語に対しては chung がある程度固定的な訳として定められているといえる。

表 1 : Chung に訳される語の訳の頻度

	之	於	于	夫	その他	原語なし	合計
chung	779	178	21	12	34	21	1045
chung 以外	252	37	1	4	-	-	294
合計	1031	215	22	16	34	21	1339

7.1 「之」からの訳

「之」は、《文言虚词全释》(李 1994)、《王力古汉语字典》(王 2000)、および佐藤ほか (2011) を総合すると、大きく次の 3 つに用法を分類できる。

- ①動詞「ゆく」
- ②代名詞「これ」「この」
- ③助詞「の」(修飾、名詞句化)
- ④前置詞「おいて」

①の動詞の用法で用いられるものは、『傳奇漫録』解音ではすべて動詞で訳されている。本稿では虚詞を主な対象とするために分析の対象から除外することとした。表 1 の出現回数にも、「之」が動詞として用いられている場合は含んでいない。④の前置詞としての用法は『傳奇漫録』では見出せなかった。

②の代名詞としての「之」と、③の助詞の「之」を別に見ると、下の表 2, 3 のようになった。

³⁰ 同例文も、Bùi T. Hùng (1987) が挙げている例文とは異なるが、理解しやすいと思われた文を筆者が選んだものの。

表 2 : 代名詞「之」

からの訳語の内訳

訳語	回数
đáy	226
chung	30
その他	9
合計	265

表 3 : 助詞「之」

からの訳語の内訳

訳語	回数
chung	749
khi	3
là	3
đi	3
その他	7
訳語なし	1
合計	766

助詞の「之」は、Bùi T. Hùng (1987) が述べたような形で chung へと訳されるパターンが 766 回中 749 回 (約 97.8%) と圧倒的多数となった。一方、Bùi T. Hùng (1987) は述べていない、代名詞の「之」については、265 回中 226 回 (約 85.3%) がベトナム語の中称の指示代名詞 đáy で訳されることがわかり、chung も一定数見られることがわかった。

助詞「之」が chung へ訳される例は (1)、(2)、(3) に挙げたとおりである。代名詞「之」が đáy に訳される例を 1 つ挙げる。

(7) (漢) 請爲使君言之 [請ふ使君の爲に之を言はん] <1:4a:6>

(喃) 嗔爲使君啞幕

(口) Xin vì Sứ quân nói đáy.

請う ~のために 使君 言う それ

「どうか使君 (勅使に対する敬称) のために、これを言わせてほしい。」

代名詞「之」が đáy 以外の語に訳される場合と、助詞「之」が chung 以外の語に訳される場合については、8.1 および 8.2 にて述べる。

7.2 「於」「于」からの訳

前置詞「於」と「于」はほぼ同じ用法で、李 (1994) によると、ともに、動作行為と関係のある対象、(受け身にて) 動作主、比較の対象、動作の場所、動作の時間、原因などを表す。

『傳奇漫録』解音にて「於」と「于」から訳される語については、表 1 の「chung 以外」をより細かく分けると、右の表 4 のようになる。

表 4 : 「於」「于」からの訳語の内訳

	於	于	合計
chung	178	21	199
ở	25	1	26
その他	8	0	8
訳語なし	4	0	4
合計	215	22	237

Bùi T. Hùng (1987) が述べた chung に訳されるパターンが 237 回中 199 回 (約 84.0%) と多

数を占めるが、*ớ* という語に訳される場合や、その他の訳され方も一定数見られる。

Chung に訳される場合としては、(4)、(5) 以外に、以下のような用例がある。

動作・比較対象

(8) (漢) 常自比於盧全陸羽 [常に自ら盧全 (ろどう)、陸羽 (りくう) に比ぶ] <I:47b:7>

(喃) 恒拷戔蒸昫盧全昫陸羽

(口) *Hằng nghi ví chung người Lư Đổng, người Lục Vũ*
 常に 自ら たとえる *CHUNG* 人³¹ 盧全 人 陸羽

「常に自ら盧全や陸羽 (茶人の名) になぞらえていた。」

時間

(9) (漢) 先人不幸奄棄孤兒于茲四載矣

[先人不幸にして奄 (たちま) ち孤兒を棄て、茲 (ここ) に四載なり] <I:21a:5>

(喃) 先人極固福侈補昆戌瑰蒸{尼今}罌餅丕

(口) *Tiên nhân chẳng có phúc, xảy bỏ con mồ côi,*
 先人 (亡くなった父) 否定 ある 福 突然 すてる 子 孤兒

chung nay bốn năm vậy

CHUNG 今 四 年 語氣詞

「父は亡くなり、突然孤兒をすてて、今は四年になる。」

7.3 「夫」からの訳

表 1 に見られるように、16 回中 12 回 (75.0%) は *chung* で訳される。³² それ以外の 4 例では、いずれも *hẽ* という語に訳されている。これについては 8.2 で述べる。

Bùi T. Hùng (1987) は「夫」のはたらきを、発語や文中の強調と述べたが、文中の用法では指示詞の用法もある。「かの」と訓読するものである。(例文 (21) 参照)

7.4 その他の語からの訳

その他の語にも、*chung* が訳語としてある程度固定的に定められていると見ることができるとある。これらが *chung* と訳される場合について、以下に数例を示す。

「乎」は前置詞としての用法の場合、*chung* に訳される。³³ 前置詞の「乎」は「于」や「於」と似て、場所、時間、範囲、動作対象、比較対象、受け身にて動作主を表す (李 1994)。

³¹ 「人」を意味する名詞 *người* (チュノムでは「導」とは異なる語。同等から目下の人に対して使う人称代名詞かつ呼称であり、二人称で用いると「汝」のような意味になる。日本語には的確な訳はないが、グロスでは便宜的に「人」とした。

³² 「おっと」「おとこ」等を意味する名詞としての用法は除外している。

³³ 前置詞「乎」は (10) を含め 9 回出現し、すべて *chung* に訳されている。なお、文末語気詞として用いられる場合は他の語に訳される。

(10) (漢) 攻乎異端斯害也已³⁴ [異端を攻(をさ)むるは斯(こ)れ害あるのみ] <II:38a:3>

(喃) 治蒸道異端害意多夥

(口) Trị chung đạo dị đoan, hại ấy chin lắm
治める CHUNG 道 異端 害 その³⁵ ただ 甚だしい

「異端の道を修めたら、害になるだけだ。」

「諸」は、代名詞の「之」と前置詞の「於」の合音としての用法の時、例 (11) のように chung と訳される。³⁶

(11) (漢) 漢蒼出獵適遇諸途

[漢蒼出でて獵(かり)するに、適(たまたま)途(みち)に遇ふ] <III:16a:8>

(喃) 胡漢蒼囉侏修及蒸塘

(口) Hồ Hán Thương ra săn, xảy gặp chung đường.
胡漢蒼 出る 狩る 不意に 会う CHUNG 道

「胡漢蒼³⁷が狩猟に出たら、たまたま彼に道で会った。」

「凡」は、文頭に置かれて「夫」と同じような「そもそも」の意味や、「一般的に」「全体として」といった意味を持つ(例文(12))。他に、数詞を含む句の前に置かれて、「すべて」「合わせて」といった用法もあり、本文中にこのような用例も見られる。³⁸

(12) (漢) 凡彼占人之田破人之産如何議決

[凡そ彼の人の田を占め、人の産を破るは如何(いかん)して議決せん] <IV:23a:1>

(喃) 蒸侈箕占蒸醜辱破蒸貼辱蒸笱論決

(口) Chung đưa kia chiếm chung ruộng người, phá chung của người,
CHUNG やつ あの 占める CHUNG 田 人 破る CHUNG 財産 人
đường nào luận quyết?
程度 どの 論じる 決める

「総じて彼が人の田畑を奪い、人の財産を破産させたのは、どのように論じて決めましょうか。」

ただし、「凡」は hễ という語でも訳され、訳し分けの基準は明確にはわからない。³⁹

³⁴ 論語からの引用

³⁵ 指示詞の「斯」は原則としてこの語に訳される。ここでは、「この害」と名詞句的に捉えたと思われる。

³⁶ このような用例は (11) を含めて 8 例ある。なお、「すべての」などの意味で用いられる場合は、その意味の mọi などに訳される。

³⁷ 胡季犛(脚注 62) の子 (?-1407)。胡朝の第 2 代皇帝だが、明に滅ぼされた。

³⁸ 数詞の前に置かれた「凡」が chung に訳されるのは 3 回、それ以外の「凡」が chung に訳されるのは(12)を含めて 4 回である。

³⁹ 「凡」が hễ に訳されるのは 19 回ある。なお chung や hễ に訳されるのは副詞としての用法のみの場合で、「凡庸な」という意味の形容詞や「俗世」を意味する名詞としての用法の場合はまた別の語で訳されている。hễ については脚注 53 および 68 参照。

「一切」という熟語（「おしなべて」などの意味）は *cả chung* と訳されている。⁴⁰ *cả* は現代語でこそ「すべて」と言う意味を持つが、古ベトナム語、とりわけ『傳奇漫録』解音の中では専ら「大きい」「大いに」といった意味を持つ。⁴¹

- (13) (漢) 一切黄家取辨 [一切黄家取り辨 (べん) ず] <I:50b:6>
(喃) 寄蒸茹戸黄辨裨
(口) *Cả chung nhà họ Hoàng biện lấy.*
大きい CHUNG 家 氏 黄 処置する⁴² 取る
「すべて黄家が受けもった。」

原文に対応する語がない場合の例（表1の「原語なし」）を1つ挙げる。

- (14) (漢) 秀才屬汝矣 [秀才汝に屬 (しょく) せり] <III:44aH:7>⁴³
(喃) 秀才篤意蒸眉丕
(口) *Tú tài đốc ý chung mà y vậ?*
秀才 傾ける 意 CHUNG お前 語気詞
「秀才（知識人、先生）がお前に意を注いでいる（関心がある）ようだな。」

漢文においては前置詞が必要ないが、ベトナム語に訳した際に前置詞が必要になる場合などにこのように *chung* が加えられている。

8. 例外の中の傾向

7.ではある程度固定化された訳語で原則に従って訳す場合を示した。ここでは、表2の代名詞の「之」から *đầy* 以外に訳される場合、また表3、表4で助詞「之」、前置詞「於」「于」から *chung* 以外に訳される場合、すなわち例外的な場合について述べる。このような場合に関しては、以下の8.1および8.2にみる2つの傾向があることがわかった。

8.1 動詞句末でない場合

代名詞の「之」は、それを含む動詞句の最後に位置しない場合、*đầy* 以外の語で訳される傾向にある。その中で特に多いのが、二重目的語の1つである場合である。

⁴⁰ 「一切」は (13) を含め4回出現し、4回とも *cả chung* で訳されている。

⁴¹ 例文 (13) に挙げた <I:50b:6> の割注に「一切大凡也」とあるのを踏まえると、「大」に *cả* を、「凡」に *chung* をそれぞれ当てた可能性が考えられる。

⁴² 辞書にはないが、「辨」の字音である。

⁴³ “H”は「下 (Hạ)」の意。2巻の34頁には「三十四上」と「三十四下」、3巻の44頁には「四十四」「四十四下」と記された頁がそれぞれ存在する。(Nguyễn Q. Hồng 2001:17)

(15) (漢) 潜發塚破棺并女骸骨散之江中 <I:42b:3>

[潜かに塚を發(あば)きて棺を破り、女の骸骨を并(あは)せて之を江中に散らす]

(喃) 譜{才與}墓打破丐棺共骸骨昆媽意散補蒸沖滝

(口) Trộm dỡ mộ, đánh phá cái quan cùng hai cốt
ひそかに 掘り出す 墓 打つ 破壊する 類別詞 棺 共に 骸骨
con gái ấy, tán bỏ chung giữa sông
子供 女 その 粉々にする 捨てる CHUNG 間 川

「ひそかに墓を掘り出して棺を壊し、女の骸骨と共にそれを川の中にばらまいた。」

(16) (漢) 問其來也則餽之茶

[其の來(きた)るを問ふや、則ち之に茶を餽(おく)る] <III:55b:2>

(喃) 晦所事吏丕時体遼朱蒸茶

(口) Hỏi thừa sự lại vậy, thời thấy đưa cho chung trà.
尋ねる その⁴⁴ 事 来る 語気詞 すなわち⁴⁵ 見る 渡す 与える CHUNG 茶

「その来たわけを尋ねると、彼に茶を贈った」

(17) (漢) 其人即導之左 [其の人即ち之を左に導く] <I:3a:6>

(喃) 所尋意卞引{多去}買左

(口) Thừa người ấy bèn dẫn đi mé tả.
その⁴⁶ 人 その すぐに 案内する 行く 側 左

「その人はすぐに彼を左に案内した。」

(15)、(17) は直接目的語(被動者)が「之」となる例であり、(16) は間接目的語(目標)が「之」となる例であり、どちらも動詞句末でなくなっている。(15)、(16) では chung に、(17) では動詞 đi に訳されている。(15)、(17) を見ると、「之」を前置詞「〜に」や動詞「ゆく」と捉えることが可能とも思われるが、(16) ではそれは不可能である。

他に、否定詞の後に動詞と代名詞「之」が来る際に倒置が起きるという現象により、「之」が動詞句末でなくなる場合があり、この場合「之」はすべて chung で訳される。

(18) (漢) 賞必當而不之私 [賞必ず當(あ)たりて私(わたくし)せず] <II:45a:6>

(喃) 賞乙當麻拯蒸私

(口) Thường ắt đáng mà chẳng chung tư.
賞 必ず ふさわしい しかして⁴⁷ 否定 CHUNG ひいきする⁴⁸

「褒賞は必ず行いに見合ったものにして、それ(褒賞)をひいきしない。」

⁴⁴ 脚注 49 参照。

⁴⁵ 脚注 19 参照。

⁴⁶ 脚注 49 参照。

⁴⁷ 脚注 17 参照

⁴⁸ 辞書にはないが、「私」の字音である。

また、「之」が指示代名詞（「この」）として用いられている箇所が1箇所のみあり、そこでは「之」は *thừa*⁴⁹ という語に訳されている。後ろに指示対象の名詞を伴うため、これも動詞句末でない場合を含むことができる。

(19) (漢) 副之子松蘿之望 [之(こ)の子に松蘿(しょうら)の望みを副(そ)へん]<I:19b:5>

(喃) 匪所昆媽蒸{篋+望}朋椽松績蘿

(口) Phi thừa con gái chung trông bằng cây tùng dây la.

満足させる その子 娘 CHUNG 望み ~のような 木 松 つる 蘿(つた)

「この娘(あなた)に、つるにとつての松のような期待をかなえるでしょう。

(夫となったその人の庇護をあなたは受けられるでしょう。)」⁵⁰

代名詞「之」が動詞句末の場合とそうでない場合、*đáy* に訳される場合とそれ以外で訳される場合の出現頻度を表にまとめると、下の表5のようになり、*đáy* 以外で訳される39回のうちの34回(約87.2%)が動詞句末でない場合に該当することがわかる。⁵¹

表5: 代名詞「之」が動詞句末か否かと *đáy* への訳の相関

	動詞句末	動詞句末でない	合計
<i>đáy</i>	210	16	226
<i>đáy</i> 以外	5	34	39
合計	215	50	265

動詞句末でないにもかかわらず *đáy* と訳される場合が16例ある⁵² ため、絶対的な法則と言うことはできないが、動詞句末でない位置に代名詞の「之」が置かれる時、*đáy* 以外の語で訳されるというのは1つの傾向として認めるに足る頻度であるといえる。

なぜこのような傾向があるのかについて、確固たることは言えないが、次のようないくつかの可能性が考えられる:

①代名詞の「之」は原則として *đáy* と訳す。しかし動詞句の最後でない位置に代名詞「之」が置かれた時、この用法を正しく理解していなかったため、機械的に *chung* と訳したり、意味の

⁴⁹ ベトナム語としては例外的に指示対象の名詞に前置される。『傳奇漫録』解音では、指示詞「其」や助詞「所」の訳として基本的に用いられる。古語辞典 (Trần T. Duong 2014) によると、*thừa* 「その人の」など所有の意味を表したり、漢語の「所」のように動詞に前置して後続の動詞を名詞化したりする働きを持つ。例文 (16)、(17) 参照。なお、「其」「所」が *thừa* ではなく *chung* で訳される場合があり、それについては 8.2 で述べる。

⁵⁰ 夫の権勢によりかかり、庇護をうける女性のことを、詩経や唐詩では松に頼るつるにたとえる。

⁵¹ 表2で代名詞「之」が *chung* に訳されるとした30回については、二重目的語の1つである場合は22回、否定詞の後に置かれることによる倒置が6回で、残る2回も動詞句末でない。表2の「その他」の9回のうち、動詞に訳される場合が4回あるが、そのうち二重目的語の1つである場合が3回である。この30回と3回、そして *thừa* となる1回を合わせて、34回となる。残りの5例については、未だ十分な説明は不可能である。

⁵² うち、二重目的語の1つであるものは1回、「(動詞)+之+以…」で「…でもってこれを～する」の意となるものが7回、「與之+(動詞)」で「これとともに～する」の意となるものが3回、「使之+(動詞)」の使役構文が1回である。なお、「拒之甚嚴」<II:36a:5>の「甚嚴」ような、代名詞「之」を含む動詞句の項といえない副詞句が続いた場合については、この副詞句は動詞句に含まないものとする。

通るように他の語で訳したりした。

② 代名詞も助詞も「之」は原則として chung と訳す。ただし chung は本来前置詞であるため、動詞句の最後に置くことはできず、語順的に訳文で動詞句の最後に置かざるを得ない場合は đày と訳す。ベトナム語と漢文の語順の相似により、これは原文において「之」が動詞句の最後になる場合とほぼ一致する。

8.2 Chung に訳されうる語が近接する場合

「於」「于」「夫」、そして助詞の「之」は、これらのうち 2 語以上が統語的に近い関係に位置している場合、そのうちいずれかが chung 以外で訳されるという傾向があることがわかった。具体的には、以下の 3 つの場合である。

- ① 語気詞「夫」に始まる節にある名詞句の中に助詞「之」がある場合
- ② 指示代名詞「夫」の後に来る名詞句の中に助詞「之」がある場合
- ③ 前置詞「於」「于」の後に来る名詞句の中に助詞「之」がある場合

以下に例を記す。

- ① 語気詞「夫」に始まる節にある名詞句の中に助詞「之」がある場合：

・語気詞「夫」→ hễ⁵³、「之」→ chung 7.3 で触れた 4 回はすべてこのパターンである。

- (20) (漢) 夫邯鄲之役 [夫(そ)れ邯鄲の役は] <I:8b:2>

(喃) 係蒸役坦邯鄲

(口) Hễ chung việc đất Hàm Đan
語気詞 CHUNG 事 地 邯鄲⁵⁴

「そもそも邯鄲の役(戦い)は」

- ② 指示代名詞「夫」の後に来る名詞句の中に助詞「之」がある場合：

・指示代名詞「夫」→ chung、「之」→ khi⁵⁵ 例文 (21) を含め 2 回。

- (21) (漢) 以阻夫師之進 [以て夫(か)の師の進むを阻む] <I:8b:5>

(喃) 黙阻蒸軍欺進

(口) mặc trở chung quân khi tiến
～ために 阻む CHUNG 軍 時 進む

「それによってその軍が進むのを阻んだ。／その軍が進むときに阻むために。」

⁵³ 現代語では「～するといつも」といった意味がある (Hoàng T. T. Linh 2011)。古語ではそれに加えて「すべての」という意味がある (Trần T. Dương 2014) 『傳奇漫録』解音では、「凡」の訳としても“hễ”が用いられている。(7.4 例文 (12) の下、および脚注 68 参照)

⁵⁴ 邯鄲は趙の都。秦の統一前、秦はここを攻撃して趙を降伏させた。

⁵⁵ “khi”は「時」を意味する名詞であり、「～する時」という従属節を導くこともできる。

③ 前置詞「於」「于」の後に来る名詞句の中に助詞「之」がある場合：

・「於」→ chung、「之」→ là (22) を含め 2 回。

(22) (漢) 溺於趙王之愛 [趙王の愛に溺る] <I:13a:5>

(喃) 漉蒸昆腰羅希趙

(口) Đắm chung con yêu là vua Triệu,

溺れる CHUNG 子 愛する コピュラ 王 趙

「趙王⁵⁶の愛(趙王を愛すること)に溺れて。／愛する子である趙王に溺れて。」

・「於」→ chung、「之」→ trong⁵⁷ このパターンは (23) の 1 回のみ。

(23) (漢) 況忍於天性之親而肆杯羹之語

[況(いはん)や天性の親に忍びて杯羹の語を肆(ほしいまま)にす] <I:13a:3>

(喃) 方之女蒸道親醜性忝麻{箆+弄}蒸例嗔鉢羹

(口) Phương chi nữ chung đạo thân trong tính trời,

ましてや 忍ぶ CHUNG 道 親しい 中 性 天

mà rộng chung lời xin bát canh

しかして⁵⁸ 放す CHUNG 言葉 請う 器 汁

「ましてや、生まれながら天が与えた親に対して残忍で、汁を一杯もらうと言いつつ放った⁵⁹。」

・「於」→ ở⁶⁰、「之」→ chung (24) を含め 20 回。

(24) (漢) 寄芳心於寂寞之枝 [芳心を寂寞の枝に寄す] <I:12a:8>

(喃) 改悉蒼於蒸梗永脛

(口) Gửi lòng thơm ở chung cành vắng vẻ

送る 心 芳しい ～に CHUNG 枝 寂寞

「芳しい心を寂寞の枝に送った。」⁶¹

・「于」→ ở、「之」→ chung 表 4 に 1 回とあるのは (25) の用例である。

⁵⁶ 劉邦の側室である戚姫が生んだ庶子。

⁵⁷ “trong”は「中」を意味する名詞であり、他の箇所では漢文の「中」、「間」に対する訳語として用いられている(例文(4)参照)。

⁵⁸ 脚注 17 参照。

⁵⁹ 項羽が劉邦の父を捕えた際、「降伏しなければ父を釜で茹でる」と劉邦を脅したが、それに対して劉邦は「私の父はすなわちあなたの父のようなものだ。釜茹でにするならば私にもその汁を一杯くれ。」と答えた。

⁶⁰ “ở”は「住む」、「(ある場所に) いる／ある」という動詞、または場所などを表す前置詞(「～で／に」)であり、「居」「在」(動詞・前置詞ともに)の訳として主に用いられる。

⁶¹ 項羽が垓下で漢の軍に追い詰められた時、項羽の愛人であった虞美人が自殺し、後にその墓に花(虞美人草)が咲いたという伝説がある。項羽に対する貞節の心が花に表れたことを表現している。

(25) (漢) 命首相季犛延入見席于賓階之下 <III:63a:8>

[首相季犛(り)に命じて延(ひ)き入れさせ、賓階の下に席に見(まみ)えさす]

(喃) 遣首相季犛排舳朱囉{密目}席排於蒸餅塘客

(口) Khiển Thủ tướng là Quý Li vờ vào cho ra mắt,
使役 首相 コピュラ 季犛 招く 入る 使役 まみえる
tiệc bày ở chung dưới thêm khách
席 並べる ~に CHUNG 下 階段 客

「首相季犛⁶²に命じて招き入れさせ、客用の階段の下で宴席でまみえるようにさせた。」

・「於」→ hon⁶³、「之」→ chung (26) の1回のみ。

(26) (漢) 趙城士女又慘於長平之禍矣 [趙城の士女又長平の禍より惨(いた)まし] <I:9a:1>

(喃) 嫪媽城諾趙史慘欣蒸禍坦長平丕

(口) Trai gái thành nước Triệu lại
男 女 城 国 趙 また
thảm hơn chung họa đất Trường Bình vậy
痛ましい ~より CHUNG 禍 地 長平 語気詞

「趙の城の男女は長平の災難よりもさらに痛ましかった。」⁶⁴

・「於」→ 訳語なし、「之」→ chung⁶⁵ 表4の「訳語なし」の4回はすべてこれに該当。

(27) (漢) 豈以皇皇霸楚乃甘於魯公之禮哉 <I:4a:2>

[豈(あ)に皇皇として楚に覇たるを以て、乃ち魯公の禮(れい)に甘んぜんや]

(喃) 呵褻弄業霸諾楚卜甘召蒸禮魯公丕台

(口) Há lấy rộng rộng nghiệp bá nước Sở
反語 取る 広大な 事業 覇 国 楚
bèn cảm chịu chung lễ Lễ Công vậy thay
すぐに 甘んじる CHUNG 礼 魯公 詠嘆

「どうして広大に楚に覇をとこなえておきながら、魯公⁶⁶の礼に甘んじるだろうか。」

表3、表4に挙げた chung 以外への訳、および「夫」から hể への訳について、その中で上に挙げた例を含め、語気詞「夫」に始まる節にある名詞句、指示代名詞「夫」の後に来る名詞句、そして前置詞「於」「于」の後に来る名詞句の中に助詞「之」がある場合(以下、「近接す

⁶² 胡季犛(1336-1407)は実在の人物。陳朝の宰相となり、1400年に皇帝少帝から帝位を奪い胡朝を建てた。

⁶³ “hon”は、比較対象の前に付けて「~より」を表す。

⁶⁴ 長平で起きた、秦と趙との戦い(例文(20)の「邯鄲の役」より前)の時、秦は勝利し、多数の趙の捕虜を生き埋めにした。「趙の城の男女」は、宋義(項羽と共に秦を撃つ軍にいたが、項羽と意見を対立させた)の策によって結果的に秦に敗れた趙の人々を指す。

⁶⁵ 「於」を chung に訳し、「之」を訳語なしとみなすことも可能である。本稿では統計の便宜上、このパターンは一律に「於」を訳語なし、「之」を chung に訳したものとみた。

⁶⁶ 魯の懷王が項羽を封じた旧号。項羽の死後、劉邦は礼を尽くして項羽を魯公として葬った。

る場合」⁶⁷と呼ぶ)の割合を調べると、表6のようになる。

表6：助詞「之」「於」「于」「夫」が chung 以外に訳される場合の中の「近接しない場合」と「近接する場合」

	近接しない場合	近接する場合	合計
之 (助詞) → khi	1	2	3
之 (助詞) → là	1	2	3
之 (助詞) → di	2	1	3
之 (助詞) → その他	4	3	7
之 (助詞) → 訳語なし	0	1	1
於 → ở	5	20	25
于 → ở	0	1	1
於 → その他	3	5	8
於 → 訳語なし	0	4	4
夫 → hễ	0	4	4
合計	16	43	59

4つの虚詞が chung 以外で訳される 59 回のうち 43 回 (72.9%) が「近接する場合」に該当することがわかった。また、近接する場合には片方が必ず chung 以外に訳されることも確認している。すなわち、近接する場合はこの 43 回がすべてである。このことから、助詞「之」、「於」、「于」、「夫」の近接性と、訳語が chung 以外になることに、強い相関関係があることが認められる。「近接する場合」に該当しないが chung 以外で訳される 16 例については、未だ十分な説明は不可能である。⁶⁸

なおこれと関連する現象として、指示代名詞「其」と助詞「所」の訳がある。この2つは『傳奇漫録』解音ではどちらも原則として *thừa* という語に訳されている⁶⁹ が、表1の「その他」に含まれる4例のみ、「其」から chung に訳されている。この4例はいずれも、原文において「其所～(其の～する所)」と、この2語が続いている場合なのである。このことから、近接する場合に訳語を変える傾向は「之」「於」「于」「夫」の4語に限らないといえる。ただし、「其所～」となっている箇所が他に1つあり、そこでは“*thừa thừa...*”と続けて同じ語で訳されているため、絶対的ではない。

⁶⁷ 例えば並列関係にある句や節でそれぞれの中にこれらの語がある場合は、その位置が近いとしてもどちらも chung で訳されているため、単純な距離ではなく統語構造を踏まえての近接性である。

⁶⁸ なお、他に chung と訳されることがある語の1つである「凡」は、chung と訳されている7回のうちの3回が、「凡」から始まる節の中に「之」を含んでおり(例文(12)はその1つ)、hễ と訳される19回のうち同様の場合は5回しかないため、この節で述べている近接性との関係は見出せない。

⁶⁹ 脚注49参照。この段落で挙げている例外4回以外は、すべて *thừa* で訳されている。本研究では出現回数を精密に数えていないが、Nguyễn T. H. Cẩm (2000:308-316)によると、「其」は238回、「所」は187回である。なお「所」は、名詞としての用法の場合は *thừa* ではなく該当する名詞で訳される。

9. 結論

岩月 (2008)、グエン T. オワイン (2013) が述べるように、ベトナムではそれぞれの漢字に対して一定のベトナム語の語を対応させたり、漢文を逐語的に訳したりしている文書が見られ、これらが日本における「訓読み」や「訓読」と平行的な現象と見られることがある。そのような文書の1つとして挙げることができる『傳奇漫録』の解音を本稿では取り上げて分析した。本研究により『傳奇漫録』解音において多義的な虚詞であっても対応する語が原則的に固定されていることがわかり、日本の「訓読」と共通した特徴が見受けられた。

しかし一方で、例外的な訳され方も無視できない数存在し、それらについては、統語的な位置や周囲の語との関係に影響を受けているという傾向が明らかになった。すなわち、代名詞「之」から *đây* 以外への訳については動詞句末でないという条件が、助詞「之」、「於」、「于」、「夫」から *chung* 以外への訳についてはこれらのうち2つが近接するという条件が、それぞれ例外的な訳し方に影響していることがわかった。そして、それでもまだ説明できない例も少ないながらあることがわかった。日本の訓読と比較すると、日本の訓読では意味や用法により読みが変わることはあっても、周囲の語の環境によって読みが変わることはほぼ見られない。⁷⁰ これを踏まえると『傳奇漫録』解音は、「訓読」に準じた固定性を見ることもできるが、「訓読」の性質とは異なる特徴も見受けられる。

この現象は多くの語で起こるのではなく、本稿で見た *chung* に訳される語とその他一部の語のみである。「之」「於」「于」「夫」は互いに用法が大きく異なるため、近接して現れることが多いことを見ると、用法の異なる同じ虚詞が続けて用いられることによる煩雑さを避けるために訳を変えた可能性が考えられる。また、*chung* の「之」や「夫」に対応するような意味は漢文との対訳資料以外で見られないこと⁷¹を見ると、特殊な文体の解音でしか用いられない *chung* を多用することを避け、理解がしやすいように工夫した可能性もある。しかしこれらは現段階では推測に過ぎず、断言することはできない。

これらのことをさらに明らかにするためには、『傳奇漫録』解音以外の対訳資料、またその他の同時代のベトナム語が書かれた資料とも比較し、『傳奇漫録』解音の訳し方やそこでの語の用法がどの程度一般的なのか調べる必要がある。それを通して、ベトナムにおける「訓読」の現象について、より包括的な把握が可能になると思われる。

⁷⁰ 「以」が動詞の前に置かれると「～を以て…す」、動詞の後に置かれると「…するに～を以てす」となったり、「於」が動詞の前に置かれると「～に於いて…す」、動詞の後に置かれると「～に…す」となったりと、訓読のしかたが変わることがあり、これは 8.1 に述べた代名詞「之」の統語的位置関係による訳し分けと共通するところがある。しかし、統語的な位置が変わらないにもかかわらず、周囲の語によって変わるという 8.2 に述べたような現象は、管見の限り日本の訓読では思い当たらない。

⁷¹ 6.2 に述べたように *Vương Lộc* (2004) の古語辞典に書かれていないことがその表れである。なお、*Bùi T. Hùng* (1987) が『國音詩集』(脚注 21 参照) での用法として挙げているものは「於」や「于」と似た用法 (*Vương Lộc* (2004) の記述とほぼ一致) に限られている。対訳資料でも、『佛說大報父母恩重經』という 15 世紀に書かれた仏教書 (*Hoàng T. Ngô* (1999) に原本のコピーとローマ字翻字あり) では、「之」の訳として *chung* が用いられていない。これは、読解よりは民衆への読み聞かせを意図して書かれたものであり、異なる文体が用いられているという要因を考えることができる。

参考文献

- Bùi Thanh Hùng (1987) “Tìm hiểu tiếng ‘Chung’ qua một vài văn bản Hán Nôm cổ”. *Tạp chí Hán Nôm*, 1(2): 43-46.
- Hoàng Đức Quang et. al. (訳) (1994), Nguyễn Dữ (原作), *Truyền kỳ mạn lục: Vaste recueil de la transmission des merveilles*. Hà Nội: Nhà xuất bản Thế giới.
- Hoàng Thị Hồng Cẩm (1999) *Tân biên Truyền kỳ mạn lục: Nghiên cứu văn bản và vấn đề dịch Nôm*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Văn hóa dân tộc.
- Hoàng Thị Hồng Cẩm (2000) (翻音、註釈), *Tân biên Truyền kỳ mạn lục: Tác phẩm nôm thế kỷ XVI*, Hà Nội: Nhà Xuất bản Văn hóa dân tộc.
- Hoàng Thị Ngọc (1999) *Chữ Nôm và tiếng Việt qua bản giải âm Phật thuyết Đại báo phụ mẫu ân trọng kinh*. Hà Nội: Nxb Khoa học Xã hội.
- Hoàng Thị Tuyên Linh (2011) *Từ điển tiếng Việt* (bản in lần thứ 2). Hà Nội – Đà Nẵng: Nhà xuất bản Đà Nẵng và Trung tâm Từ điển học.
- 岩月純一 (2008) 「ベトナムの『訓読』と日本の『訓読』: 『漢文文化圏』の多様性」中村春作ほか (編) 『「訓読」論: 東アジア漢文世界と日本語』: 105-119. 東京: 勉誠出版.
- 川本邦衛 (1999) 『傳奇漫録刊本攷』慶應義塾大学言語文化研究所.
- 川本邦衛編 (2011) 『詳解ベトナム語辞典』東京: 大修館書店.
- 李靖之, 李立 (1994) 《文言虚词全释》中国劳动出版社.
- Nguyễn Quang Hồng (2001) (翻音、註解), Nguyễn Dữ (漢文原作), Nguyễn Thế Nghi (字喃文訳), *Truyền kỳ mạn lục giải âm*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Khoa học Xã hội.
- Nguyễn Quang Hồng (2008), *Khái luận văn tự học chữ Nôm*, TP. Hồ Chí Minh: Nhà Xuất bản Giáo dục.
- グエン・ティ・オワイン(Nguyễn Thị Oanh) (2013) 「ベトナムの漢文訓読について」第 109 回訓点語学会講演. 東京大学, 2013 年 10 月 20 日.
- Nguyễn Tran Huan (訳) (1962), Nguyễn Du (原作), *Vaste recueil de légendes merveilleuses*. Gallimard / UNESCO.
- 佐藤進・濱口富士雄 (編) (2011) 『全訳 漢辞海 第三版』東京: 三省堂.
- Trần Trọng Dương (2014) *Nguyễn Trãi Quốc âm Từ điển: A Dictionary of 15th Century Ancient Vietnamese*, Hà Nội: Nhà xuất bản Từ điển Bách khoa.
- Vũ Đức Nghiệu (2010) *Dẫn luận Ngôn ngữ học*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội.
- Vũ Đức Nghiệu (2011) *Lịch sử từ vựng tiếng Việt*. Hà Nội: Nhà Xuất bản Giáo dục Việt Nam.
- Vương Lộc (2002) *Từ điển từ cổ*. Hà Nội – Đà Nẵng: Nhà Xuất bản Đà Nẵng và Trung tâm Từ điển học.
- 王力 (主編) (2000) 《王力古汉语字典》中华书局.

Vietnamese Nôm Preservation Foundation, Nôm Lookup Tool,

<http://nomfoundation.org/nom-tools/Nom-Lookup-Tool/> [2016 年 4 月 22 日アクセス]

Fixed and Exceptional Translations in *Truyện kỳ mạn lục giải âm*, a Classical Chinese – Chữ Nôm Vietnamese Bilingual Document: Focusing on *Zhī*, *Yú*, *Yú*, *Fú*, and the Functional Word *Chung*

WASHIZAWA Takuya

Keywords: *Truyện kỳ mạn lục*, giải âm, Vietnamese, Chữ Nôm, Classical Chinese, Translation, Grammatical Word, Xundu

Abstract

In *Truyện kỳ mạn lục giải âm*, a Classical Chinese – Old Vietnamese bilingual document written in 16th-century Vietnam, the Vietnamese part is known to be a literal translation of the original Chinese text. In this paper, we analyze quantitatively the correspondence between the Vietnamese functional word *chung*, which has various usages in the translated text, and the Chinese words *zhī* 之, *yú* 於, *yú* 于, *fú* 夫, etc. in the original text. We find a general rule that these Chinese words are translated *chung* in most cases, but there are also a number of exceptions. By analyzing the exceptional cases, we found a correlation between the grammatical context and the translations of those words: The translation of the pronoun *zhī* tends to depend on the syntactical condition of whether it is placed at the end of a verbal phrase or not; the translation of the particles *zhī*, *yú*, and *fú* tends to depend on whether two of these words are placed near each other or not. These conventions of *Truyện kỳ mạn lục giải âm* are partly similar to those of Japanese *xundu* (kundoku).

(わしざわ・たくや)